

江戸で創業した小間物屋と飯能焼

磁器と陶器は共存共栄

今日、私たちの食卓にはさまざまな形や大きさの碗や皿が並べられ、生活に彩りを与えてくれている。しかし、このような当たり前の風景は磁器が日本で生産されるようになった江戸時代からである。江戸時代より前の食器といえば古代は土師器や須恵器、中世になると漆器が主流であり、陶器は甕・鉢・壺類などの製作が主で、限られた階層の人々が使う特殊なやきものという位置づけであった。

磁器の登場により漆器の食器は少なくなっていき、また小坏や大皿などこれまでになかった器が食器として普及する。陶器はというと、甕・鉢・壺類など耐久性に優れた大形器種の製品を製作し続けることで磁器とは上手く住み分けをし、共存共栄の関係を保ってきた。ところが、江戸時代中期頃から陶器に対する人々の需要に変化が現れる。新しい器種や意匠が増え、特に陶器製の食器、文房具、化粧道具の小形製品が発達する。

地方窯のやきもの事情

大形の生活用品を作っていた陶器を一気に高級陶器へ押し上げたのが京焼である。それまで無名の職人であった陶工は、野々村仁清や尾形乾山などの“作家”“芸術家”ともいえるスター陶工が現れ、茶道具、香道具、文房具などの高級陶器を生産する。つぎつぎと京焼の窯場が起こり生産規模が大きくなると、一般向けの普及品も多く手がけるようになる。京の雅を醸し出す錆絵や色絵が施された陶器は、たちまち各地の消費者の心もくすぐり、より一層の量産化が望まれるようになった。すると、このニーズを各地の陶器生産者が見逃すはずもなく、京焼を意識したやきものが各地で作られるようになる。今日ある陶器デザインは、少なからず皆京焼の影響を受けているのである。

飯能焼の経営戦略

そんな京焼の影響を受けたやきものの中に飯能焼^{はんのうやき}がある。やきものは、有田焼や瀬戸焼、美濃焼、唐津焼、笠間焼、九谷焼、信楽焼のように「〇〇焼」と製作地の地名で呼ばれるものが多いが、江戸時代末期、現在の埼玉県飯能市にも飯能焼という陶器を焼く窯が現れた。飯能焼の生産時期は江戸時代末期の天保年間(1830)頃から明治20年(1887)頃とされ、操業時期はとても短い。暗緑色や黄褐色の釉調に、白化粧土のイッチン描きで梅や松、瓢などが描かれているのが特徴である。特に、飯能焼の陶器窯のひとつである原窯は、その操業規模、期間などの点で他の窯をはるかにしのぎ、資料数も多く、数度の発掘調査で製品の特徴も明らかになりつつある注目の窯である。

近年の原窯跡の発掘調査結果によると、飯能近郊で流通していた飯能焼の器物と江戸や江戸近郊に売り出していた器物には差異があることが分かってきた。飯能焼でもっとも多く焼かれていたのは片手鍋で(全体の60%以上を占有)、暗緑色の釉とイッチン描きという飯能焼の特徴をもった皿・小鉢類も販路の広い器種であった。ところが、江戸や江戸近郊の発掘調査で出土例が多いのは、小形の徳利や小水差しといったもので、居酒屋や飯屋、宿屋などが多い江戸向きに作られたと思われる。武蔵国の外れに位置する小さな陶器窯が、江戸に製品を売り出して成功することができたのは、①特徴あるデザイン(暗緑色の釉・イッチン描き)に統一し、ブランドイメージを確立させたこと、②他産地が得意とする染付や色絵、鉄釉などの技法に手を出さず、独自の技法を貫いたこと、③大量に消費される人気の坏・碗類はあえて作らず、飯能焼の粘土の特性を活かした片手鍋の大量生産で勝負したこと、④飯屋や宿屋にターゲットを絞る、江戸向きのニッチな器種を製作したこと、が挙げられる。原窯では何をつくりどのように売るのが、市場リサーチを事前に行っていたという。相当な経営手腕である。

【特集】

江戸で創業した小間物屋と飯能焼

【ご案内】

- 企画展
「ミニチュア愛^{らぶ}」開催
- テーマ展示
「伊勢半 化粧品ディスプレイのカタチ」開催中
- エデュケーション・レポート10

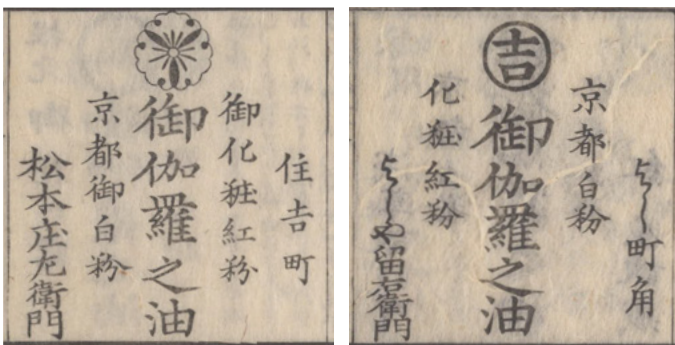
容器は飯能、中身は京都、そして江戸で売った化粧品

江戸向けに飯能焼が売り出した器種の中で、特異な存在のものがある。それが、化粧容器と考えられる合子である。



飯能焼原窯跡出土の白粉合子 飯能市教育委員会蔵

上写真の飯能焼の合子も、前章までに述べた特徴の暗緑色の釉がかかり、イッチン描きで文字が施されている。写真後列左の合子蓋には「すみよし町／ヤマにサ／玉かつら／松本仕入」、右隣は「すみよし町／ヤマにサ／ふじの雪／まつ本仕入」、前列の合子蓋には「よし町／艶桜／よしや仕入」と書かれている。合子蓋中央に書かれる「玉かつら」「ふじの雪」「艶桜」が商品名である。文政7年(1824)刊『江戸買物独案内』に「住吉町 松本庄右衛門」、「よし町角 よしや留右衛門」の掲載があり、いずれも白粉や紅、髪油などの小間物を扱う店舗であった。この二店は明治に入っても商売を続け、上記の商品名は明治期の白粉広告でも確認できる。よって、これらは白粉容器と考えられる。鬢付け油も同形の合子に入っているの、鬢付け油の合子では?と思う人もいるだろう。しかも『江戸買物独案内』のガイドを見る限り、二店ともに伽羅之



『江戸買物独案内』(文政7年・1824)に掲載される「松本庄右衛門」と「よしや留右衛門」 国立国会図書館蔵

油が主力製品であったようだ。しかし、この3点の合子は蓋の裏まで全面に釉薬がかけられていた。白粉は皿の上で水に溶いて使用するので、面積の広い平皿が必要である。白粉段重の蓋裏も白粉溶き皿として使うことができるが、同じようにこの蓋裏も白粉を溶くのにちょうどよい形状をしている。ちなみに鬢付け油の蓋裏は、施釉していないものが多い。以上のことから、これらは白粉容器だと思われる。直接、江戸の小間物屋から注文を受けて生産されたものである。

ところで外容器を飯能に発注しているが、中身の白粉も自家製ではない。合子蓋にイッチン描きで「松本仕入」や「よしや仕入」と書かれていることから分かるように、どこから仕入れてきている。どちらの店も『江戸買物独案内』に「京都白粉」とわざわざアピールしているとおり、ずばり中身は京都産である。この当時の上質な白粉といえば、やはり京都産の白粉には敵わないといったことだろう。消費地江戸は小間物屋が発達した所以である。

江戸時代にもあった!タレントショップ

話は変わるが、江戸時代中期以降になると町人文化の繁栄によって化粧をする層の裾野が広がる。その流行を主導していたのが歌舞伎役者や遊女である。歌舞伎役者は今のアイドル的存在で、役者にちなんだ関連グッズなども作っていた。役者自ら絵師に頼んで自分の絵を描いてもらい、プロマイドのように売った。絵師にとってもいいアルバイトだったそうである。そこに一般の商人たちが目をつけずにはいない。特に白粉や髪油は、歌舞伎役者にとってなくてはならないものなので、化粧品の宣伝販売を副業とする者が多かった。

八文舎自笑著『役者全書』(安永3年・1774)には、当時、歌舞伎役者が関わる油見世が13軒あると記されている。ひとたび役者が、演目の幕間に白粉や歯磨き粉などの商品名を大書した看板を掲げて口上を述べれば、たちまちその商品は飛ぶように売れるという算段である。このほかに歌舞伎役者を廃業し、その後油見世を経営する者もあり、これらもとても繁盛していた。

さて実は、飯能焼の白粉合子を使っていた「住吉町／松本庄右衛門」の店は、歌舞伎役者松本幸四郎見世である。『役者全書』に「岩戸香白粉 今難波町 是元祖松本幸四郎見世と云」との記述が確認でき、天保7年(1836)刊の方外人著『江戸名物誌』では、岩戸香白粉を販売する松本の見世が住吉町になっているので、安永3年以降に住吉町に移転したと思われる。また、『江戸買物独案内』の松本庄右衛門は、屋号紋に三つ銀杏が描かれているが、三つ銀杏は松本幸四郎の定紋である。松本庄右衛門=松本幸四郎が関わる見世で間違いなさそうである。

平成の初め、原宿の竹下通りなどにタレントショップが乱立していたことを覚えている方もいるだろう。今も芸能人が副業でお店を出し、成功したり失敗したりさまざまであるが、江戸時代の人気役者も多くが自分の名前を冠した店を出していた。忙しい歌舞伎役者が商売にどこまで首を突っ込んでいたかは分からないが、人気役者の名前やロゴを使った商品にニーズがあるのは明らかなので、もし粗悪な偽物の商品が出回ってしまっただけは名前が使われた役者の看板に傷がついてしまう。本業に影響が出てしまう可能性もあるのだから商売に関わるにはよく勉強し、慎重にことを運んだと思う。この頃の歌舞伎役者は、芝居だけでなく商売上手で世情にも明るくなければならなかったのだから大変な職業だ。

企画展

らぶ
ミニチュア愛!

2024年2月20日(火)ー4月7日(日)開催 ※会期中は日曜も開館 [主催]紅ミュージアム [協力]川内コレクション

「ちいさい、ちっこい、ちっちゃ!」展に続く、ミニチュア企画第2弾!

なぜか無性にミニチュアなものに惹き付けられてしまう—そんな界限にしてみれば、ミニチュアには“小さくて可愛い”という理由だけでは片付けられない魅力、奥行があります。現実では見慣れたモノが、見慣れないスケール感で出現することの面白味や、思わず見入ってしまうリアル感。小さく切り取られた世界を目前にして、ある者はすみずみまで観察したり、ある者はその世界観を追体験や疑似体験したり。そして、作り手の技量と遊び心に感動することもしばしば…。こうした奥行にハマってしまうのは、得てして大人なのです。

今回は、ミニチュア好き界限の皆さまに「川内コレクション」を精選してご紹介します。川内コレクションとは、川内由美子氏(雑道具研究家)が長年にわたって蒐集されたミニチュア雑道具類(もともと小さく作られた雑道具をさらに小さくしたもの)を中心とする一群です。雑道具といえば、雑祭りに飾り付けて女の子が楽しむものというイメージが定着していますが、かつては文化人・趣味人の大人が、それも男性がミニチュア雑道具を熱心に蒐集した事実があったことは、

あまり知られていません。

本展では、江戸の名店「七澤屋」の小振りな雑道具から昭和レトロな趣にあふれた日用品のミニチュアまで、眼福の“小”世界が広がります。小さなモノ、巧緻な細工に惹かれる者たちよ、心ゆくまでお楽しみあれ!

※本展ではお雛さま(雛人形)は展示しません。



雑道具(鏡立・櫛台・紙台) 七澤屋製 江戸時代後期



雑道具(菓子筆箱) 木屋漆器店製 明治時代初期



針箱 大正時代～昭和時代前期



寿司 大正時代～昭和時代前期

(すべて川内コレクション)

【観覧料金】

土・日・祝日の観覧は事前予約制(オンラインで日時指定)、平日は予約不要。※事前予約方法等の詳細は本展webサイトをご確認ください。一般600円/限定リーフレット付き800円/障害者手帳所持者とその介護者1名は300円/中学生以下無料

関連プログラム

おしゃべり観覧Day

2024年3月8日(金)10:00~17:00

この日だけは展示室でおしゃべりOK! 家族や友人、パートナーと会話しながら観覧したい方におすすめです。事前予約不要。

来場者は必ずマスクをご用意・ご着用ください。

テーマ展示「伊勢半 化粧品ディスプレイのカタチ」開催中

2023年10月31日(火)~2024年1月27日(土)

店頭に並ぶディスプレイは、消費者に購入を決心させる「購買時点広告(POP広告)」のひとつとして、重要な役割を担っています。化粧品においても、他社製品との差別化を図る施策として、商品陳列台やテスター台(色見本台)を使った販促活動が盛んに取り組みされてきました。

今展では、昭和25~50年(1950~75)頃にかけて伊勢半が制作したキスミー製品やエリザベス製品のカウンター・ディスプレイに注目します。当時の化粧品は、販売員と直接やり取りをしながら購入する対面販売が主流でした。ディスプレイにもこの販売方法に特化した仕掛けがいくつもみられます。こうしたディスプレイの「カタチ」に目を向けていきます。

昭和25・26年(1950・1951)制作
キスミー特殊口紅・特殊ホホ紅テスター台

学ぶ・楽しむ

紅ミュージアムのいろいろ

これをお読みの方の中には、紅ミュージアムの定例講座「江戸の化粧再現講座」(江戸時代の美容本を参考に、当時の化粧法のデモンストレーションを学芸員の解説つきでご覧いただく講座)に参加されたことがある方もいるかもしれません。明るい会場照明のもとで化粧の仕上がりを見ると、例えば白粉を塗った肌は白すぎますし、お歯黒をした口元は異様に感じてしまうかもしれません。しかし、江戸時代の屋内は現代のように明るくはありませんでした。朝は照明器具を使わず外光を取り入れ、夜は行灯などの仄かな灯りの中で生活をしていました。そこで、会場の照明をしばらく、化粧の仕上がりを見てみると…不思議なことに異様さは薄れ、お歯黒には年増の妖艶な雰囲気さえ漂います。

このような経験をきっかけに、「夏休みこども自由研究2023」の一環として「江戸の朝、江戸の夜-明るさから考える昔のくらし-」という新規ワークショップを開催しました。会場には長屋が出現! 実際の長屋一軒の約1/2を再現しました。障子に仕込まれたLED電球と会場のスポットライトで朝の外光を、長屋とともに制作した行灯で夜の仄明さを表現しました。

前半は長屋を舞台にした体験、後半は体験をもとに江戸時代の暮らしについて皆で考えるグループワークを行いました。夏休み中に2回開催し、合計15名の小学3~6年生が参加してくれました。

体験は、引き戸を開けて長屋に入り、靴を脱いで畳に上がるところからスタート。長屋の住人の気分になれるよう、紅ミュージアムの所蔵資料や、このワークショップのために収集した江戸時代の資料をできるだけ使用し、没入感を得られるようにしました。

まず朝の照度の中で、朝の身支度として「化粧をする(紅点し)」体験。ワークショップのために収集した銅鏡はすっかり錆びてい

たのですが、顔が映るよう事前に磨き上げました。その銅鏡を所蔵資料の鏡かけに掛け、紅はもちろん小町紅を使用し、お化粧を体験しました。

夜の照度の中では、行灯のもと「本を読む」「文字を書く」体験をしました。本は、墨で書かれた江戸時代の算法書(数学の教科書)と、現代の児童書を読み比べました。墨の文字は行灯の仄かな灯りの中でも不思議と浮かび上がり、一方、現代の印刷物は平面的で読むのが難しかったようです。

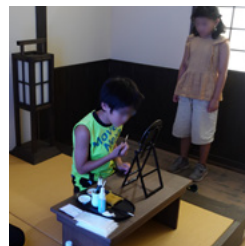


後半のグループワークでは、「江戸時代のような、暗い夜をどのように過ごしますか?」「みんなの家にあって、江戸時代の家にあるもの/ないものは?」等のテーマについて、前半の体験や配布したワークシートをもとに皆で考えました。子どもたちに「ワークショップに参加する前と後で『江戸時代』のイメージは変わりましたか?」と質問したところ、15人中12人が「変わった」と回答。長屋にはお風呂がないこと、お風呂に毎日入らないこと、便所が共同であることなどに驚き、「江戸時代に暮らすのは難しそう」「夜は暗いから過ごすのが大変そう」という意見があった一方、「昔はいろいろと工夫して暮らしていたことに驚いた」「江戸の人はもっと不便な生活で大変だと思っていた」「予想以上に江戸の文字が見やすかった」など、体験したからこそ出てきた感想がいくつも

ありました。過去を理解するためには、ひとつの事象だけでなく、それを取り巻く環境ごとと理解することが大切です。そして、体験することで理解が深まることも多くあります。紅ミュージアムではこれからも、歴史の理解に役立つような体験活動に力を入れていきたいと思えます。

過去を理解するためには、ひとつの事象だけでなく、それを取り巻く環境ごとと理解することが大切です。そして、体験することで理解が深まることも多くあります。紅ミュージアムではこれからも、歴史の理解に役立つような体験活動に力を入れていきたいと思えます。

※本講座は、公益財団法人乃村文化財団「NCF助成金」の助成を受け実施しました。



紅ミュージアム通信、一時休刊のお知らせ

紅ミュージアム通信は、今号vol.57をもちまして一時休刊いたします。今後、コンテンツや刊行形態等を見直し、紙面の刷新を図る予定です。発行再開の目処が立ち次第、当館webサイトやX(旧Twitter)にてお知らせいたします。何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。



紅ミュージアム
BENI MUSEUM

Presented by
KISSME

開館時間 / 10:00-17:00(最終入館は16:30まで) ※短縮開館等の変動あり

休館日 / 毎週日・月曜日・創業記念日(7月7日)・年末年始

入館料 / 無料 ※ただし、企画展観覧は有料

アクセス / 地下鉄 東京メトロ銀座線・半蔵門線・千代田線「表参道」駅下車 B1出口(階段)より徒歩12分 / B3出口(エスカレーター・エレベーターあり)より徒歩13分

バス 渋谷駅東口バスターミナル 51番乗り場 都01新橋駅前「南青山七丁目」停留所下車

〒107-0062 東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL.03-5467-3735

最新の情報は当館webサイトでご確認ください。 <https://www.isehanhonten.co.jp>

